

御挨拶

会長 玉津徳太郎



日本大学三島高等学校同窓会は今年で第十八期生入会式を挙行し会員数一万九千二百名をもつ大きな集団となつた。その基金も年々累積されて、現在では強固な基盤を築くにいたつたといふ。まさに新時代に適応する強力な仲間集団に成長したといふことができる。

会の運営についても、いくたびかの改正の結果、今日では大集団としての構造と機能をえることになつたように思われる。まず、

各年度毎の卒業生から選出される幹事から選出される常任幹事から選出される幹事長（十支部）、支部長のうちから選出される幹事長・副幹事

その事業についても、本部事務局所管のものと、各支部所管のものとに分けられている。本部事業としては、年度毎の会員名簿整理、年度毎の会報発刊、各支部事業費補助を含む年度予算、決算などの基本的事業から、催しものとしては、新会員の入会式、記念講演会、母校各行事の援助、後輩を対象とする奨学金制度の実施を始め、必要と認められる各種の事業が行われている。

各支部の事業は、支部の地域性に立つて、年度毎の計画により、会員とその家族をも含めた季節毎の行事や催しもの、懇親会などが行われ、その結果は本部事務局に報告され、かつ会報に掲載されることになつてゐる。

また、会の意志決定機関としては、常任幹事会、拡大幹事会、支部長会の議を経て総会で決定することになつてゐる。総会は幹事長の申出によつて会長が招集するが

他の会議は幹事長の招集により進められている。決定事項の遂行は事務局長の指示で処理されている。事務局は母校における窓教職員の協力によって円滑に進められている。



第7号

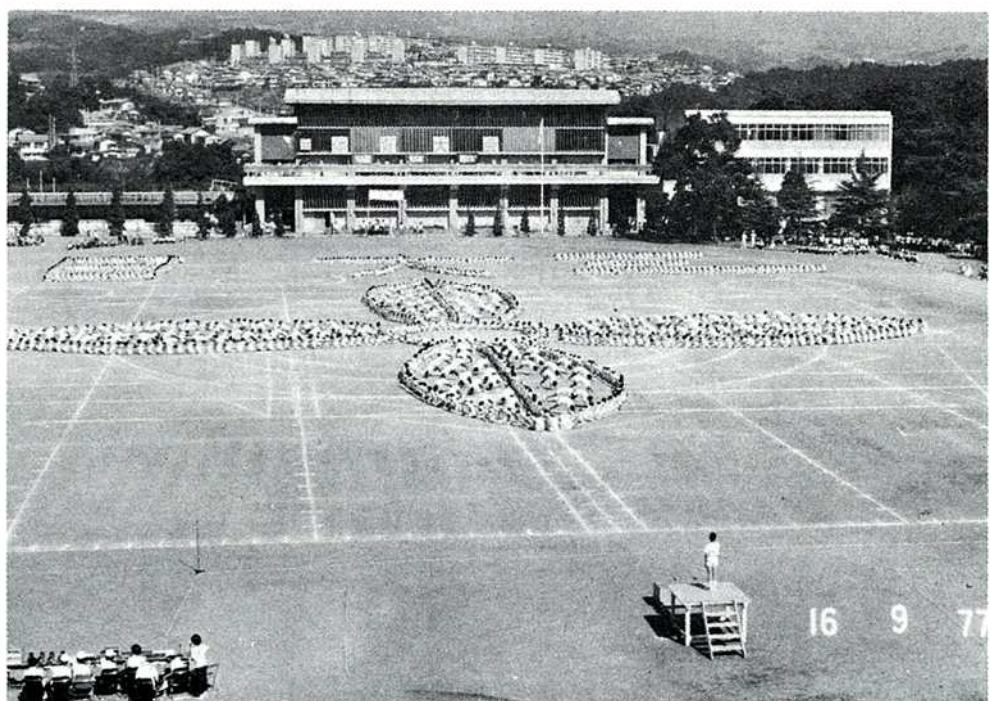
昭和53年2月18日
静岡県三島市文教町2
日大三島高校同窓会 発行

による人間関係の形成への志向であることが窺われる。それは同時に、各会員が変動してやまない流動社会に対処する際の力となり、まさに、新時代の新しい仲間づくりにつながるものと思われる。

こうした現況はとりもなおさず同窓会員各個の成長と、同窓会の独立性と社会性の調和を示すものである。たまたま、会長としての

私は昭和五十二年十月三十日をもつて、学校長の任を終わり、後進にその任をゆずることになった。この機会に会員のうちから会長を選出してはということを提案したいと思う。

いずれにしても、わが同窓会が充実・成長したことを同慶に思うと共に、陣容を新たにし、益々発展されること祈念してやまない。



“集団の美を” 桜陵祭マスゲーム

校長に橘和彦教頭が就任

文理学部(三島)次長と母校校長を兼任していた玉津徳太郎会長が、文理学部次長の職に専念することとなり、校長の職を辞任いたしました。これにともない、昭和五十二年十一月一日付をもって、橋和彦教頭の校長昇任が発令されました。また、教頭には、薬袋邦明総務主任が任命されました。

今後の同窓会に望む



校長 橘 和彦

育方針を確立され、教育基盤と教育機構が整備されているので、その伝統を維持すると同時に、社会情勢の変化に応じて対処しながら更に躍進を期したいと思つています。

今回玉津校長が文理学部次長として、三島学園の最高責任者に栄転されました後をうけて、不肖わたくしが校長を拝命しました。玉津前校長は、三島学園創設の貢献者であらせられると同時に、大学の立場からの本高校生みの親であらせられ、初代角田陽六校長の後、さらに二代校長として、本校の基盤を確固たるものにされました。そしてこの地方有数の高校にまで発展せしめられました。その跡をうけますわたくしは、浅学菲才その重責を全うできるか危惧するのですが、そうもいつた。

ところで、最近の社会は私学でも純然たる公的機関としての性格を要求するようになつて参りました。先刻新聞で御承知のとおり、有力な私学例えは、日大、慶應、早稲田等々は文部省より定員を守り量より質の教育を確立するようにとの指導がありました。さらに私立の医科・歯科大学においても入学の公正を期するために特別の寄付金を取らないように要求されています。それもうけて本学も繪長から「昭和五十三年度以降の入学試験に際し、いつさいの入学寄付金は徴収しないこと」とし、いわゆる「個人紹介」についても受け

付けないことに致しました」との示達が各部科校、付属高にあり、さらに新聞記事として有名新聞の第一項に前記のことが公表されました。

以上のように入学条件を厳しくすると、私立の情実的よさがなくなるとの批判もあるのですが、教學ならびに付属高としては総長命令を遵守し、社会的評価をうける方が、大きな目で見て、正当であります。教育という公的使命をもつてゐる本学ならびに付属高としては総長命令を遵守し、社会的評価をうける事が、大き目で見て、正当であります。發展できる道であると信じます。

以上の見地から本校は先生方の一致協力による人の和により、前述の如く厳しくなった私学の方に対する批判を謙虚に受けとめると同時に、私学の教育の独自性を純粹の立場で高揚していきたいと思います。

その点につきましても、同窓生諸君の公正的正義感に溢れる、母校に対する愛情をお願いするものであります。

既に同窓会の十一支部の体制は確立され、成果をあげられています。本校も来年度即ち今年、成人式にあたる二十周年を迎えることになります。基礎を整えた同窓会はもう独立で活動を開催できると思います。前校長も同窓会長を卒業生にすべきだとの考え方をお持ちのようでありますし、わたくしもそう思いますので、そういう体制の下での同窓会が卒業生同志は勿論、母校の発展のために活動されることを期待致すものであります。

支部だより

○熱海支部

同窓会の皆様、お元気でいらっしゃいますか。熱海支部も、暖冬の所為か、日本一早咲きの梅も今が見頃で、恒例の梅祭りは初の「梅の女王」も百余名の応募者となり、期間中の賑わいが予想されています。

同窓生からなる三島支部も、発足して六年になります。その間に、定期幹事会、新入会員歓迎会、支部親睦会など、種々の行事をおこなう。その活動も地域に定着しつつあります。中でも、沼津支部との合同行事は今年で五回目になります。真夏の夕、沼津港から船で涼を求めるこの親睦会の企画を楽しみにしている支部会員も多く、回を重ねるごとに参加者も増し、昨年は百名を越える盛況でした。

三〇二
高木 三谷

「へ、お出掛け下さい。母校を愛する気持ち、懐かしむ気持を同じくする者同志、先生方の御健と、母校の発展をお祈りしています。そして新会員の皆様の、新鮮な息吹きと、パワーを期待し、卒業をお祝いすると共に、新会員となられます日、総会でお目にかかる日を楽しみにしています。

支部活動の充実をめざして

三島支部長 遠藤日出夫
第十八期生の皆様、御卒業おめでとうございます。我々、三島支部会員一同、新会員入会を心から歓迎いたします。

三三三三三三三三三三三三三三三三三三三三
TTTTTTFEDCBAのののののののののの
EDCBA十九八七六五

岡增大岡遠西秋杉遠望河土小加岡石植
本山石田藤井野山藤月島屋林藤澤原田

豐直憲昇樹茂尚嘉良乃江昇尚乃子嘉良乃子乃豊子乃江昇尚乃子嘉良乃子乃子

情報交換の場として

幹事長 高田菊平



世の中は大変な時代となつた。一昨年、昨年と、長きにわたる不況経済は、既に不況というのではなくそれがあたり前と思わなければならぬほどに景気の停滞を続いている。今年の新春の新聞・ラジオ・テレビなどから流れる景気の予想を見聞してみても、そのどれをとらえても決して明かるい材料はない。

はたしてどういう年となるのだろか。

同窓会員の皆さんにおかれましても、今年のゆく末に対し、大いに考えをめぐらしておられる方でしよう。そしてこのようない世の中には、なお堅実な歩みを、それぞれの分野でしておらることと思う。そして苦労を苦労とすることなくがんばっておられる方だと思う。こういう世の中であればあるほど、同窓会員として、それぞれの会員が、いかにこの難局ののり

きりに努力し、工夫をこらしてきているかを知り合つことが、お互にとつて大いに参考になり勉強になることだろうと思う。

既に第一期生を初めとして、多くの同窓会員が社会にて、それぞれ中堅として活躍しており、それら同窓会員の活躍の様子を聞くにおよんで大いに期するところがあるのは自分だけではないと思う。

近い将来、これら同窓会員が、お互いの経験をもちよつて、お互に連携をたもち、切磋琢磨しあうような場を同窓会の中にもつことができるようになつた。またそういう交流の場も同窓会のはたす役割のひとつであると思う。

同窓の仲間とは、右のような願いを持つて、心の内で、またある時には現実の行動と立場を持つて、人生を歩んでいる者達なのです。とくに、卒業後の時間の経過とともに、母校と同窓の仲間達とのつな

第十八期生の皆さん、卒業おめでとう。いよいよ皆さんは、日大三島高校を本当の意味での母校として、命ある限り見つめ、そして背負つて行くことにとつて大いに参考になり勉強になることだろうと思う。

既に第一期生を初めとして、多くの同窓会員が社会にて、それぞれ中堅として活躍しており、それら同窓会員の活躍の様子を聞くにおよんで大いに期するところがあるのは自分だけではないと思う。

「新入会員を迎えて」

昭和五十三年度　|| 欽迎のことば ||

（幹事長 高田菊平氏の紹介）
本校第一期卒業生。田方郡天城湯ヶ島町出身。現在、株式会社ニュー・デルタ工業専務取締役、同窓会幹事長として七年余同窓会發展の名実ともに、けん引的の存在。

三年間の高校生活を終え、本校卒業生となり、改めて、在校中の先輩方にお世話になつていてことを知り、心から感謝しております。それと共に、私達も母校建学精神に燃える同窓会員として名前を連ねることになりました。

特に、本会が十支部をもとに活発な活動を、はじめようといた時より尽力され、支部設立には各地に出向き広く本会の主旨をとき、役員決定等、支部活動の基礎作りに活躍!!

新入会員挨拶へ

第十八期生 稲村 厚

本校同窓会は、二万五名近い会員という大所帯を、十地区的支部を通して、活発な活動を続けている。そこで、若輩者の私達も安心してうち溶けていけると思つております。また、広く社会に活躍している先輩方との出合が楽しみでもあります。私達十八期生も、先輩方と同様、大いに母校愛に燃えており、及ばずながら、本同窓会の目的達成のための事業などに、積極的に参加・協力する所存であります。

しかし、何分私達はまだ未熟者であり、先輩方に教えていただきなくてはならないことがたくさんあります。先輩の皆様、さまざまな不安と希望を胸に、新たな同窓会員になりました私達を、よろしくお願ひいたします。

がりに、様々な形と深い精神的関係を持つようになります。

今、この現代を見渡した場合、大変に重く厳しい社会状勢にあることは、皆さんも知っているでしょう。このような現実において、個々の人生の歴史を築くことは、そうたやすくはありません。同窓の仲間の存在は、このような中にあって、皆さん的人生の為にきっと何かの力になるはずです。我々の母校もついで多くの同窓生を有するようになりました。皆さんそのぞれの地域社会の中で、楽しく活躍されることを祈ります。

クラブ選手権全国大会をめざして
バスケットボール部OBチーム

同窓生のつながりの場は、支部会や同期の会が中心となつていま
す。ここに、やや形式を異にしま
すが、運動部卒業生で結成され
いるバケットボール部OBチ
ムを紹介しましょう。

どのクラブでも同じですか。在学中活躍した部員達も卒業してしまったとプレーから遠ざかり、年一回のOB会に集まつたり、休日には在校生の試合の応援にかけつけた程度のつながりしかもてないものでした。

卒業生の中には、インターハイ出場経験者も多く、だれともなく「我々もチームをつくろう」と言い出したのがきっかけで、その名も母校の桜から「三桜クラブ」なるチームを発足させたのが三年前でした。

一年目、少人数ですが、週二回午後六時から、二時間の練習することになりました。始めのうちに、一人一人が昔のプレーを取り戻すのに精一杯でした。

二年目、県協会に登録し、初めて参加した県スポーツ祭は、気楽な雰囲気で、優勝してしまったのです。その後も新しい卒業生を迎えて、メンバーを



強化し、常に県大会ベスト4に活躍を続けています。

こうした卒業生のチームが在学中に与える影響も見逃がれません。オフシーズンは日曜日には、先輩対後輩で練習一ムを行い、技術面はもちろん試合マナーなど精神面で在校生模範を示しています。

今年も、県大会優勝チームとして、県代表に選ばれ、三月に行われる全国クラブチーム選手権をさして、忙しい仕事のあい間をつて、週二回の練習に励んでい

強化し、常に県大会ベスト4に活躍を続けています。

こうした卒業生のチームが在学中に与える影響も見逃がれません。オフシーズンは日曜日には、先輩対後輩で練習一ムを行い、技術面はもちろん試合マナーなど精神面で在校生模範を示しています。

今年も、県大会優勝チームとして、県代表に選ばれ、三月に行われる全国クラブチーム選手権をさして、忙しい仕事のあい間をつて、週二回の練習に励んでい

本校にもプロ野球選手が誕生いたしました。ここに彼の経過を簡単に御紹介しましょう。彼は、昭和四十三年に本校に入学し、三年間を血と汗にじむ日大三島の野球部に所属し昭和四十五年の全国高校野球県大会で第2シードの浜商を破り調子をつけた本校は、優勝を目指し前にひかえた準々決勝にて甲子園出場の静高に延長14回4対3で、おしくも破れたのでありました。しかし野球への執念は強く、昭和四十六年三月高校卒業後、一年間、金指造船所に勤務し、また野球部に入部し仕事と野球両面か

でも優位に立ち、昨年も優勝しましたのは御承知のことと思います。彼も入団後はスケジュールにおかれ、いそがしい毎日を送っています。

ここで本校野球部々長であります北岡先生ならびに稻葉監督（土期生）に三枝氏について語っていただきました。北岡先生は、……たしか僕が部長に就任した年、彼は二年のはずでした。彼が入学してきたとき、そのピッティングをして、まだ部長でもない私が当時の山田監督に「こいつはいい。球のキレイがよい。今から仕込んで、も

であくどい野球人になつてもらいたいと思つています。と北岡先生は当時を思い出しながら語つて下さいました。稲葉監督も同様に一年先輩になる関係で現在も交流があり彼の特徴をしつかりつかんでいて次の事に注意してくれれば大投手まちがいなしと言つておられました。それは、故障をしないこと、球質を多くすること、勝負強くなつてほしい。と、また精神面では申し分ないので、これから二十勝できる投手になるよう、そして阪急ブレーブスの大黒柱となるようと言つておられました。彼

十一期生 三枝 規悦 氏

十一期生
三枝規悦氏

くべく努力がなされ、猛訓練が繰り返されたのであります。この年には大昭和製紙も山静代表で活躍し投手としての身も充実してきたころ現在の阪急ブレーブス（勇者）から話しがあり昭和五十一年十二月二日十日入団したのであります。

パリーゲ（阪急、ロッテ、南海、日本ハム、クラウン、近鉄）の中

ある私も彼の起用をつい忘れたほどでしたが、とにかく、投手としての大器の片鱗は一年次からはつきりとうかがえました。三年のときのあの大活躍、そして金指一本で昭和を経て現在の阪急ブレーブスへと本人にとつて悔いのない野球の世界に躍りこめたんですから。。。少しきたない表現をゆるしてもらいますならば、人を押しやつ

という気持ちをもちなおしてもらいたいと思います。皆さん周知のようになります。人のために自分が蔭の力になってしまふ性格をもつていています。やはりプロですから、野武士のようなそれこそ図太いブレーブス魂であくどい野球人になつてもらいたいと思っています。と北岡先生は当時を思い出しながら語つて下さいました。稻葉監督も同様に一年先輩になる関係で現在も交流があり彼の特徴をしつかりつかんでいて次の事に注意してくれれば大投手まちがいなしと言つておられました。それは、故障をしないこと、球質を多くすること、勝負強くなつてほしい。と、また精神面では申し分ないので、これから二十勝できる投手になるよう、そして阪急ブルーバスの大黒柱となるようにと言つておられました。彼の出身は葦山であり、本校卒業生ですから今後も同窓生一同活躍を期待したいところです。また彼の現在の連絡場所は左記の通りです



住所
兵庫県西宮市高松町一九一三
阪急ブレーブス合宿所内
○七九八一六六一一九五六
Tel

声援御願いいたします

同窓生プロフィール

全国実業団バレー部リーグ

『ヤシカ』監督 清水貞美氏



同窓生のなかでスポーツ界で活躍している諸氏は多い。陸上競技の室伏重信選手（日大教員）、バケットの尾鷲邦男選手、青木崇選手（ともに日本鉱業）など、本紙プロフィール欄で紹介の通りであります。

彼、清水貞美君は、母校を昭和四十六年三月第十一期生として卒業、在校当時よりバレーボール部の中心選手として活躍、四期卒の同窓生である勝又年男監督の期待にこなえた。そして卒業と同時に日本大学文理学部に進学、やはりここでもバレーボール部に所属し四年間のはげしい練習に耐えた。この間、高校バーボール界の名門、全国優勝の戦歴をもつ八王子実践高校のコーチ、社会人チーム「日立」のコーチをも歴任し、本部ではトレーナーとしても活躍。このころより持前の性格のよさ研究心旺盛の態度から、周囲よりの信頼も厚く各大学チームにもその名は知れた。

昭和四十九年、文理卒業、カメ



この一月、清水氏来校の際、彼は次のように語り、固い決意のほどを示した。

「名門ヤシカ」をあざかり十ヶ月、実業団リーグでは、現在三戦全勝、今リーグでは非優勝し、日本リーグへの復帰が実現できるよう頑張っています。何んとしても私の力で、名門「ヤシカ」を復帰させたいと思います、と力強く語ってくれた。

われわれ同窓生も彼の念願が実現するよう祈るとともに、大きな声援を送るものであります。

ラの「ヤシカ」に入社、そしてコチとしての立場になった。以来献身的なコーチングを続け、その実績がかれ、昭和五十二年五月大きな期待を受けながら監督に就任、現在に至る。

「ヤシカ」チームは大沢長蔵氏を部長に、清水監督を助ける岩原豊子コーチ、そして千葉泰子主将を中心とし美人揃いの十三名のまとまりとファイトある女子チームだそうです。

現在、我々の住む静岡県は「東海大地震説」が声高に叫ばれ、地震に対する正しい知識がないままに、いつ、どこで、その大きさはと次々に大きな不安がつのるばかりです。

氏はその話の中で、物理学や力学に基づく地震学の背景とその歴史に始まり、とかく誤解を生みやすいマグニチュードと震度の違いをわかりやすく説明され、過去に起つた地震のパニック騒ぎを例により「地震災害の傷口を二倍にも三倍にも広げてしまう人災こそ恐ろしい」と強調されていました。

我々の住んでいる地域の地質構造から考えても、将来、あるいはいつ来るかも知れないより大きな地震に対しても、日常から心構えをしておく必要があります。この金井先生の講演はその意味でも、我々に一定の示唆を与えてくれるものだと思います。

なお、五十三年入会式には、元富士山測候所長の藤村郁雄氏をお招きし、「富士山の気象について」と題して講演していただく予定です。

第十七期同窓会入会式

記念講演会

講師 金井 清先生

卒業後、進学して学問を志し、あるいは就職して実社会で活躍が期待される新入会員の前途を祝う行事として、同窓会では毎年、記念講演会をおこなっています。

昨年、十七期生入会式には日本大學生産工学部長をお迎えし「地震の話」と題した講演会を開催しました。

現在、我々の住む静岡県は「東海大地震説」が声高に叫ばれ、地震に対する正しい知識がないままに、いつ、どこで、その大きさはと次々に大きな不安がつのるばかりです。

支部の支部長、事務局員、オブザーバーと毎回盛況のうち、議論白熱の状況であります。

更に、今後の幹事会は、新たに各卒業期の代表をも加え巾広く意見を求め、積極的な同窓会運営を展開していく方針であります。

幹事会は定期的に開催されるものと、必要に応じて行われるものとがあります。近年は年間五回、六回開かれております。そしてその内容は常に前向きのものであります。

海に對する正しい知識がないままに、いつ、どこで、その大きさはと次々に大きな不安がつるばかりです。

支部の幹事長をはじめ十

代の幹事会は、幹事長をはじめ十

幹事会の動向

幹事会は同窓会組織の中にある、総会のもと中枢機関としての役割を果すことは、ご承知通りであります。

この幹事会は定期的に開催されるとともに、必要に応じて行われるものとあります。近年は年間五回、六回開かれております。そしてその内容は常に前向きのものであります。

支部の幹事会は定期的に開催されるとともに、必要に応じて行われるものとあります。

の同窓会発展につき笑いを混ぜながら冬の一夜を楽しく過しました。特に今回話題となつたことに、玉津徳太郎同窓会長が約十六年間もの長い間、同窓会の会長としてのお骨折に対し、何か感謝の意を表わそではないか。それにはどんな事が良いかを話し合いました。

又、鍋を囲みながら高校時代の思い出に花が咲き、いつしか時間も過ぎ、お互の親睦を深め、今後の同窓会の発展を確認し、会を閉じました。

そして、この様な楽しい集まりには、多数出席してもらいたいものだと最後に感じました。

定期的行事の企画立案から支部事務、親睦会と、事務局と相まって多方面に渡っております。また構成メンバーは、幹事長をはじめ十

代の幹事会は定期的に開催されるとともに、必要に応じて行われるものとあります。

支部の幹事会は定期的に開催されるとともに、必要に応じて行われるものとあります。

忘年会記

納涼船

—華麗な花火も—

恒例となつた納涼船は七月二十四日(日)に実施された。八十余名の同窓生、その家族など多数の参加のものと六時に沼津港を出航した。船中では、スカンジナビア号ホテルの近くに停泊しての花火大会は、陸とは趣きを異にした素晴らしいもので、夏の海上に華麗な花を咲かせ、船中一同我を忘れ大いに楽しんだ。

船は屋形船で、沼津、三津、大瀬などの港湾をめぐり、約二時間余にわたり、時の過ぎるのも忘れて納涼のひとときを過ごした。本年も多人数の参加のもとに成功を収めた。

恒例の納涼船を合言葉に、次回も是非多数の御家族ぐるみの参加を期待したいものである。

母校の部活躍状況

付属とは言え、年々大学への入学者条件が厳しくなつており、その部活動に与える影響も少なくありません。特に運動部においては、今までの様に、多少の好成績があれば大学へ、という甘い考えもできなくなり、いきおい勉強との両立が難しくなつて来た様です。しかし、学術・文化・運動の各部共、顧問と生徒が一丸となり毎日遅くまで練習をした結果、多くの部で優れた成績を出す事ができました。

以下にそれらを紹介します。

（生物部）

第二十一回静岡県学生科学賞 内田光俊他七名

（美術部）

第二十一回全国学芸コンクール 共同研究賞 大野経明他五名

（全国ポスター・絵画・写真部門） 入選 室伏芳仲 佳作 杉山菊江 露木知浩 入選 土屋昭子 他十二名 全国高等学校デザイン写真コンクール 入選 中山美智代 他七名

（放送部） 勇励賞 アイデア賞 南徹哉 入選 中山美智代 他七名

（水泳部） 全国放送コンクール ラジオ部門 出場 アナウンス部門 入選

NHK杯全国放送コンテスト



練習風景

二位（女子） 東海大会 浅井陽一郎・大木永充三位 国体 浅井・水野・宮川三位 水野五位

（テニス部） 高校総体県大会 男子団体 二位 男子ダブルス 三位 優勝

（卓球部） 高校総体県大会 男子ダブルス 三位 優勝

（スケート部） 静岡県スポーツ祭 総合優勝十四連勝

（高校総体県大会） 総合優勝七連勝

（全国大会出場） 全国大会出場

岩手県盛岡市インターハイ出場 七名

長野県松本市国民体育冬季大会 出場四名

その他陸上部の小松丈二君、体操部の関根君も全国大会に出場し日頃の練習ぶりを十分に發揮してくれました。

卒業生の想い出

福島基裕先生

昭和四十年四月、本校に奉職して以来、十二年が過ぎた。その間、学年主任として送り出した学年は五つになる。十二年間で一、二、三と持ち上がりれば四つのはずだが、四十三、四、五と三年間連続して三年生を受け持つたためである。私が始めて本校の担任になった四十年は、三年に仁藤、藤井、一年に中嶋、江川、一年に国府方、そして今は亡き鈴木（哲）各教諭が在学して居り、学級生徒数も多く、生活指導に大変骨の折れる時代であった。その翌年、一年の学年主任として迎えた諸君の中に宮代次郎、杉山利道、西江藤本教諭などの俊才が居り、この学年が三年生の時、折からの学園紛争の余波を受け、伝統の丸坊頭に終止符を打つた。昭和四十三年六月であった。以後二年間連續して三年生を受け持ったが、学園は平静に戻り、本校からも大進学率は年々上昇の一途をたどつた。四十四年には普通科も一科、二科とわかれ、昭和四十六年に入学した諸君も三年生まで持ち上がり、十五年度には文理系で、農獸医学部の特待生になつた森谷睦男君が居た。昭和四十九年三月卒業の中には理工の杉田、元医の後藤正人、札幌医大的那須高一、岩手医大的木村貞昭の諸君が居た。その四十九年四月に

恩師

入学した諸君も三年生まで持ち上がり、昨年三月卒業したのであるが、この中には歯の松本守由、筑波大の青木英彦、一科には統一テストで付属最高点を取った法の石垣誠の諸君が居る。

そして昨年、四度目の一年生を

受け持つたわけであるが、この

一年生が卒業する昭和五十五年

度の進学はどうなるであろうか。

学力は一朝一夕にして成るもの

ではない。一年生での、二年生

での、真剣な努力が三年生にな

つて花開くのである。大学、あ

るいは社会に巣立つた諸君、高

校時代の三年間を振り返つて今

後の指針にして欲しい。過去は

思い出のためでなく、未来のた

めにあるのである。

エンジニアを目指す

後藤弘人先生

昭和三十六年四月本校に工業科が併設されたとき私は東京の学校から赴任し、はやくも十七年を経過した。高度成長下の当時地域の要請や企業の拡張等の社会情勢の中で、土木・建築・機械・電気の四科の卒業生は年々増加し、社会へと巣立つて行きました。しかし、ここ数年来の不況の波は工業関係の上に寄せようになり、いつの間にか卒業生の多くは大学進学へと向くようになつてきた。

この十七年間私は普通科の授業も何時間か受持つことはあるが、殆んどは工業科、中でも電気科の生徒との付き合いが多かつた。一般にエンジニアを目指す者は将来の目標がはつきり決

くの顔が、十七年間の年月の流れに関係なく脳裏に重なつて浮んでくる。また、普通科目に加え、たくさん専門科目を学ばなければならぬので、学習の面

でついて行けない者や、苦しさ

を逃れ横道へ逸れた者もいたが

それらの卒業生の多くが立派に

立ち直り、社会の一員として頑張つていて、時に来校して先生

方を感激させている。

これらの卒業生と会うたびに

私は在校中何をしてあげること

ができたのか、現在の生徒には

どのように対処したらよいかか

教育の難しさ、特に学校教育の

あり方を考えさせられるが、一

つとして最善の方法や解決策を

見出せないまま毎日が過ぎてい

く状態である。しかし、本校に

も同窓の先生方が増え、工業の

各科にも一名位ずついて、各科

の同窓会を結成しまとめられて

いるが、電気科でも工業一期の

卒業生である石橋先生が中心に

なり毎年十月十日に同窓会を開

き、百余名の出席者が集つてい

る。これらやクラブ関係で數十

名が集まるテニスのOB会等に出席し、直接授業やクラブ活動で指導した同窓生に会つて、昔話をしながら「お世話になります」と挨拶されると、それまでのが悩みは一遍吹き飛んでしまった。まだややねばと決意を新たにさせられる昨近である。

物質的な豊かさばかりが問題にされる最近の社会の中では、精神的な抛り所が求められなければならない時であると痛感させられる。どうか同窓生諸君も母校での想い出と共に、教師や先輩それに同級の友人と紹介を大切にしながら活躍されるよう希望して筆をおく。

母校だより

昭和五十二年度

事業報告

お知らせ

行事一覧			
四月	<ul style="list-style-type: none"> ○始業式 ○入学式 ○前期生徒会委員選挙 ○遠足 	十月	<ul style="list-style-type: none"> ○研究授業 ○スポーツテスト ○保健教室 ○日大体育祭
五月	<ul style="list-style-type: none"> ○避難訓練 ○研究授業 ○演劇教室 	十一月	<ul style="list-style-type: none"> ○統一試験(3年) ○修学旅行(2年)
六月	<ul style="list-style-type: none"> ○保護者懇談会 ○保健教室 ○読書会 	十二月	<ul style="list-style-type: none"> ○保護者懇談会(3年) ○終了式 ○冬季休暇
七月	<ul style="list-style-type: none"> ○交通安全教室 ○終了式 ○夏季休暇 ○三年生講習会 	一月	<ul style="list-style-type: none"> ○冬季休暇 ○始業式 ○保護者懇談会(1・2年)
八月	<ul style="list-style-type: none"> ○夏季休暇 ○教職員研修会 	二月	<ul style="list-style-type: none"> ○同窓会入会式 ○高校入試
九月	<ul style="list-style-type: none"> ○始業式 ○桜陵祭 ○後期生徒会委員選挙 	三月	<ul style="list-style-type: none"> ○卒業式 ○終了式

昭和五十二年度の学校行事は別表の通りですが、そのうちの主なものについて説明します。

四月には入学式を行い新入生を迎えて昭和五十二年度が始まりました。

五月には、これも年中行事となつた避難訓練を行い、まさかの時に備えました。

七月には、免許証取得者を中心とし交通安全教室を開き、交通事故違反の撲滅をはかりました。

九月には年間最大の行事である桜陵祭を行い大成功を収めました。十一月には、三年生が進学の最後関である統一試験を受験し、好成績を收め、大学の厳しい態度にもかかわらず、進学に大きな見通しをつけました。二年生は修学旅行を行い、将来良き想い出となることでしょう。

三月には千百余名が母校を巣立ちそれぞれの道へ進みます。

一、第十七期生入会式

第一回 四月十六日(土)

長い間、母校の校長先生をして

<p>四、総会</p> <p>日時 四月二十九日</p> <p>十五時より</p> <p>場所 母校八号館ホール</p> <p>幹事長挨拶</p> <p>次第</p> <p>会長挨拶</p> <p>支部報告</p> <p>議事</p> <p>(一) 五十一年度事業及び 決算報告</p> <p>(二) 五十二年度事業計画 及び予算案</p> <p>(三) その他</p> <p>懇親会</p>
<p>六、第一期同窓会</p> <p>四月九日 三島「吳竹」</p>
<p>七、納涼船</p> <p>七月二十四日</p>
<p>八、工業科同窓会</p>
<p>九、第四期生同窓会</p> <p>電気科 十月十日</p>
<p>十、忘年会</p> <p>十一月二十七日</p>
<p>十一回</p> <p>五一、幹事会</p> <p>二月十一日(土)</p> <p>於「田代グリル」</p> <p>第十七期生入会式につ いて</p>

に第一段階として第一期生より第六期生までをその対象とし、その消息を追つております。住所を変更なされた方、是非とも事務局にご一報下さい。

事務局

下四二 三島市文教町二丁目
日本大学三島高校内
同窓会事務局宛

編集後記

すでに二万という膨大な人数に近づきつつあるこの同窓会の活動を、いかに支部運営の基盤を確立し、発展させてゆくか、大いなる仲間意識をもつて真剣に語り検討しなければならぬところにきていい。この会報をその原点として、もつと同窓生の「生の声」が聞かれればと念じつつ、第八号を発刊する。

編集後記

すでに二万という膨大な人数に近づきつつあるこの同窓会の活動を、いかに支部運営の基盤を確立し、発展させてゆか、大いなる仲間意識をもつて真剣に語り検討しなければならぬところにきていい。この会報をその原点として、もっとと同窓生の「生の声」が聞かれればと念じつつ、第八号を発刊する。

- 7 -

日本大學三島高等学校
同窓會規約

第十三条

の他、必要とする役職を置き幹事会の互選により選出する。幹事会に常任幹事会を設ける。常任幹事会は幹事会の役職員ならびに常任幹事によつて構成され、必要により幹事会にかえることができる。

前文

表彰規定

第一条 本会は日本大学三島高等学校同窓会と称する。

第二条 本会の事務所は、これを日本大学三島高等学校内に置く。

第三条 本会会員は、日本大学三島高等学校の卒業生をもつて正会員とし、現教職員および元教職員をもつて特別会員とする。団員は、母校建学の精神にのつとり会員相互の親睦と融和を図り、母校の発展興隆に寄与することをもつて目的とする。

第五条 本会は、前条目的達成のために左の事業を行なう。

一、会員相互の親睦と融和をはかるための各種行事

二、母校の発展興隆に関する各種行事への協力・参加

三、その他、目的達成のために必要な諸行事

第六条 本会は、事業遂行のため左記の機関を置く。

第二章 機 関

第七条 一、総会 二、幹事会 三、支部会 四、事務局

第五節 編集委員会

第六节 総 会

総会は本会運営の最高決議機関である。総会の議事は出席会員の過半数をもつてこれを決する。但し、必要により各支部を代表する支部長会をもつて、総会の決議にかかることができる。

総会は本会運営についての立案実行の一切の事務を幹事会に委嘱する。

総会は四月一日より翌年三月三十一日までの年度一回、会長がこれを召集し、幹事会、会計監査の所管事項の報告をうける。但し、緊急を要する事項に關し、会長が認めた時、又は会員多数の要求があつた場合、会長は臨時に召集しなければならない。

第二節 幹 事 会

幹事会の運営機関として左記の事項を立案し総会の承認を経たのちこれを実行する。

一、予算・決算に関する事。

二、事業計画に関する事。

三、会則の改廃に関する事。

四、その他、第五条によつて必要と認めた事項。

第十一条 幹事会の召集は幹事長が行ない、年三回以上、原則として過半數の幹事出席のもとに開催する。また、幹事長は幹事の三分の一以上の要求があつた場合は、臨時に幹事会を召集しなければならない。

幹事会には幹事長一名、副幹事長二名、会務、会十二名、そ

<p>第十三条 その他、必要とする役職を置き幹事会の互選により選出する。 幹事会に常任幹事会を設ける。常任幹事会は幹事会の役職員ならびに常任幹事によつて構成され、必要により幹事会にかえることができる。</p>	<p>第十四条 幹事会は本会運営上、必要と認めた場合に臨時に特別の機関を設けることができる。</p>
<p>第三節 支 部 会</p>	
<p>本会は各地区に支部会を設け、本会の目的達成の推進を図る支部の運営については、本規約に準じ細則は各支部によるものとする。</p>	
<p>第四節 事 務 局</p>	
<p>事務局は幹事会のもとで本会運営を円滑ならしめるよう務める事務局は幹事会より委嘱された者をもつて構成する。</p>	
<p>第五節 編 集 委 員 会</p>	
<p>編集委員会は幹事会に所属し、原則として年度一回の会報発行、その他、本会運営上、必要な広報の任にある。</p>	
<p>第六章 附 則</p>	
<p>本会は左記の役員を置く。</p>	
<p>会長一名、幹事長一名、副幹事長二名、幹事、常任幹事、会計監査二名</p>	
<p>会長には学校長を推戴する。会長は本会を統理する。</p>	
<p>幹事長は幹事会を代表し、本会運営の責任を負う。</p>	
<p>副幹事長は幹事長を補佐する。</p>	
<p>幹事は各卒業学年の代表者が当たり、学年の意見を代弁し併せて会務を分担する。</p>	
<p>常任幹事は各地区支部会の代表者が当たり、地区の意見を代弁し併せて会務を分担する。</p>	
<p>幹事会監査は総会において選出され、経理を監査し、総会にその旨を報告し承認をうける。</p>	
<p>各役員は総会の承認を経て、その任につき職務にあたる。期は二年とする。但し、重任はさまたげない。</p>	
<p>第五章 表彰・その他</p>	
<p>本会の経費は会費ならびに寄附をもつてこれに当てる。</p>	
<p>正会員は卒業時に終身会費を日本大学三島高等学校会計課に納入する。</p>	
<p>本会の会計年度は四月一日より翌年三月三十一日までとする。</p>	
<p>第三十一条 本公司の会計年度は四月一日より翌年三月三十一日までとする。</p>	
<p>第三十二条 第本公司に貢献したものは会長が幹事会の議により、総会の承認をえ、これを表彰することができる。</p>	
<p>会員として名誉を毀損する行為があつたときは、会長が幹事会の議により総会の承認をえ、これを除名することができる。</p>	
<p>顧問は会長がこれを委嘱し、本会運営上の諮問に応える。</p>	
<p>規約の改廃については幹事会の議により、総会の承認を行なう。</p>	
<p>制度施行 昭和三十六年三月十一日</p>	
<p>改正施行 昭和四十七年四月一日</p>	

前文 本規定は日本大学三島高等
学校同窓会規約第五章三十
二条に基き、その適用細則
を定めたものである。

第一条 本会員にして、社会的
に顕著な業績をあげた者
に対し、所定の手続きを
経て表彰することができる。

第二条 日本大学三島高等学校に

(二) 獎励金の支給をうける団体は、生徒会所属の団体で、顕著な業績をあげ更に一層の充実・発展が期待されるものとして、校長より推薦された団体とする。ただし奨励金は一団体を原則とする。

第三条 第一条、第二条の表彰式は、年度末とし、総会または入会式に行う。

本規定は昭和五十二年二月十二日より施行する。